

人に貢献しない職はない

固い話から入ります。日本国民の三大義務を知っていますか。「教育を受けさせる義務」「勤労の義務」「納税の義務」の三つです。その中の「勤労の義務」について書きますね。

日本国憲法で、なぜ「日本国民は働かなければならない」と定められているのでしょうか。「大人になったら、自分が食べ分ぐらいいは自分で稼げ」ということでしょうか。もしそうだとすると、十分な蓄えがあったり、養ってくれる人がいたりすれば、働く必要はないわけです。「国民の義務」ということは、蓄えがあろうがなかろうが、養う人がいようがいまいが、日本国民である以上働かなければならないということを意味します。私が思うに、社会というものは一部の者が作っているのではなく、国民全員の手で作られていることが大きく関係しているのではないのでしょうか。つまり、「働くこと」は生きるための手段であるのと同時に、社会を機能させる原動力になっているということです。

今日は午後から、十数名の講師を招いて、二年生が「働くこと」について学習します。その方たちは、それぞれの職業で活躍してみえます。講師の方々の職に対する考えや思いに触れ、「働くこと」を深く理解することがねらいです。

職という限りは、利益を追求することが目的の一つであることとは否定できません。しかし、利益だけではないということに気付いてほしいものです。

この世の中には、人に貢献しない職はありません。直接的間接的の違い、濃厚か希薄の違いはあっても、必ず職のベクトル（矢印）は自分以外の人に向かっていてはいるはずで

す。サービス業や製造業については、「客」の存在が必要不可欠ということ、ベクトルの向かっている先がわかりやすいと言えますね。大学の研究者はどうでしょう。実験室という限られたスペースで、薬品や器具、コンピュータに向かって難しいことに取り組んでいるイメージがありますね。しかし、導き出す研究成果は必ず社会に役立っています。その研究成果を待っている人、喜ぶ人が必ずどこかにいるのです。

つまり、「働くこと」は、人のために貢献することです。そういう貢献が無数集まって、社会が正常に機能するのです。「職業に卑賤（ひせん）はない」と言います。二年生の生徒たちには、講師の職を学ぶのではなく、講師の職を通して「働くこと」の本質を学んでほしいと願っています。

（十一月五日記）



助産師の話を聞く二年生